卒業論文の要旨

論文題目	黒人とアメリカ音楽の関係性 ～アメリカにおけるヒップホップ音楽の強さ～
氏名	佐藤萌奈
メジャー	アメリカ地域研究

（要旨）

アメリカ各地では、黒人差別と警察官の黒人に対する暴力に抗議するBlack Lives Matterと呼ばれる社会運動が拡大している。そんな中、音楽配信サービス「Spotify」は、2023 年に最も聴かれた音楽ジャンルがヒップホップであることを発表した。ヒップホップは、アメリカの黒人地域で若者たちに親しまれる娯楽として生まれた。文化的にも経済的にも大成功を収めたヒップホップは、今やアメリカ社会に大きな影響を与えうる地位を獲得している。しかし、黒人地域で生まれた音楽が最大のジャンルになる一方で、アメリカの音楽界での黒人に対する人種差別はなくなったわけではなかった。

本論文は、黒人地域発祥であるヒップホップはなぜ人々に支持されるのか、また、アメリカの音楽界で起きた差別問題に抗してアーティストはどのような対応をとってきたのかを調査して、論じたものである。

2017 年に行われた音楽最大式典であるグラミー賞では、主要部門の受賞者はすべて白人アーティストであった。黒人アーティストの曲は、白人アーティストと同じ割合で人々に聴かれていたのにも関わらず、授賞式ではそのような状況が反映することはなかったのだ。これは黒人に対する差別だととらえられ、アーティストたちはこの事態を受けてグラミー賞をボイコットするなどの行動で差別に対抗した。

2020年に入ると、警察官による黒人殺害事件が数多くメディアに取り上げられるようになる。警察官といえば一般的には「市民を守る存在」という認識があるが、黒人から見た警察官はそうではないことが明らかになった。そして、警察官と黒人の関係性にフォーカスしたヒップホップ調の曲が多くリリースされ、例年以上に支持される。

ヒップホップが多くの人々に支持される理由のひとつとして、人々が差別問題に関心を持っているという共通の基盤があることが指摘できる。音楽界における人種差別が完全に無くなったとは言えないが、アーティストたちによる差別撤廃に向けての行動により、人種問題が改善に向けて動きつつあることは確かである。

（指導教員の推薦のコメント）

本論文は、ヒップホップという音楽ジャンルに注目し、アメリカの音楽界でのその位置づけから黒人差別の問題までを論じたゼミ論をさらに発展させて、BLM（Black Lives Matter）運動の興隆とあいまって、黒人ミュージシャンが差別問題をどのように作品の中で発信してきたか、そして、音楽業界における自らへの差別に抗してどのように活動してきたかを論じたものである。

アメリカの音楽への興味と差別問題への関心から、2 年間で自らの問いを持続的に発展させ、差別の撤廃への展望を見出そうとした意欲作であると言える。